

誰もが抱える悩みを。パツと解決！

福田貴一先生の 福が来るアドバイス



早稲田アカデミー
教育事業第二本部副本部長
福田 貴一

学習における「レディネス」

「読んだことがある」という経験

私が初めて『ころ』を読んだのは、たしか高校の教科書だったのではないかと思います。正直にいうと、あまりはつきりとした記憶はありません。一部分の抜粋だったせいもあるのでしょうが、そのときはあまり「面白い」と感じなかったですし、心を動かされ、深く考えるような「感動」もなかったのだと思います。

私が次に『ころ』を手にとったのは大学生のときでした。実家の書庫で偶然見つけ、「そういうえば教科書に載っていたな」といった思いから読み始めてみたのですが、一気に引き込まれてしまいました。登場人物の先生の思いを理解できる部分があり、一方でよくわからない部分もあり、それでも読み進めていくうちにあ

もり」になっても、次に同じ問題をやってみるとやっぱり自分の力では解けなかった……ということがあると思います。

「レディネス」とは

早稲田アカデミーの新人講師研修では、「生徒指導において大切なもの一つに『レディネス』がある」という話をします。「レディネス＝準備性」ということなのですが、研修を受ける新人講師の多くは、最初は「先生がしっかりと準備すること」と捉えるようです。「授業をするための準備」と考えて、「教材やテキストをしっかりと読んで準備をすること」「板書案をつくること」などをイメージするのでしょうか。

しかし、実は全く逆なのです。学習や教育における「レディネス」とは、学習をする側（塾でいえば生徒側）の内的な準備性を指す言葉なのです。

この「レディネス」にはいくつかの要素があります。早稲田アカデミーの研修では、まず、「授業に臨む生徒の心的状態」を「レディネス」としています。学校の授業よりもスピードが速く密度も高い授業を効果的に受けるためには、より高いレベルでの集中力が求められます。わかりやすいえば「よし、しっかりと頑張つて授業を受けるぞ」という気持ちで臨むことが必要なわけです。そのために、早稲田アカデミーでは授業開始時の「あいさつ」で気持ちを切り替えさせるようにしていますし、全員が出席してい

る種の「衝撃」のようなものを感じたことを今でも覚えています。

「読んだつもり」「わかったつもり」

読書にはいろいろなスタイルがあります。書かれているストーリーの面白さを楽しめばよい、という読書もあるでしょう。ただ、『ころ』は、ストーリーの面白さが作品の本質ではないと思います。登場人物、特に先生の心情を理解し、その心情に共感したり、あるいは共感できなかつたり……というところが、本当の意味での面白さなのだと思います。そういった意味において、ストーリーを理解しただけでは、「読んだつもり」になっているだけといえるのではないのでしょうか。高校生の私がそうであったように。

ることがわかっていても、あえてしっかりと名前を呼んで出席をとり、きちんと返事をさせるようにもしているのです。また、夏期合宿や夏期集中特訓・正月特訓など、より高いレベルでの「レディネス」をつくりたいときには、「ハチマキ」などを利用することもあります。

学習の準備段階としての「レディネス」

一方で、「レディネス」には別の要素もあります。生徒（学習者）に、その内容を習得するのに必要な準備（素地）が備わった状態で教えることが効果的である、という考え方です。「教育の適時性」と呼ばれることもあるのですが、これは大きく二つの要素に分かれます。一つはカリキュラムに代表されるような、知識面での準備です。わかりやすい例を出せば、「わり算」を習っていない生徒に「分数」を教えても理解できない、といったことです。

もう一つは、精神面における成長・発達段階です。精神的にある程度の発達段階に達していなければ、与えられる内容を十分に理解できる状態に達しない、という考え方です。逆に、ある分野においては、その学習に適切な時期を逃してしまつと学習効果が薄れる、という考え方もあるようです。

『ころ』を理解するための「レディネス」

最初にご紹介した小学5年生の生徒は、精神

ある日の授業前、小学5年生の生徒が文庫本を読んでいた。「何を読んでいるの？」と尋ねたら、表紙を見せられました。夏目漱石の『ころ』でした。「難しくない？」と聞いたら「うん……なんとなくわかる」という答えが返ってきました。はたして、彼女は本当に『ころ』を理解できている、といえるでしょうか。今回は、学習における「レディネス」について書かせていただきます。



学習において、「わかったつもり」になるのは危険なことです。本質的な理解に到達していないのに「理解したつもり」になっていると、正しい思考につながりません。例えば算数でも、問題が解けなかったときに、解説を読んだり質問をしたりすることでその場では「わかったつ

的に成長しているタイプで国語の成績も良かったので、『ころ』の内容はある程度読み取れていたでしょう。ただ、本当の意味で「理解できていたか」という点では、やはり難しいのではないかと思います。そのための「レディネス」がまだできあがっていないからです。先生のなかにある「人間に対する疑心」、「自分への疑心」と「自己嫌悪」、その背景にある明治時代の考え方……。それらを理解するための「レディネス」ができあがったときに、もう一度手に取ってほしい作品の一つです。その生徒のお母様にも、「彼女が高校生か大学生になったときに、『もう一度読んでみるといいよ』と勧めてあげてください」とお話ししました。

皆様も、もう一度『ころ』を手にとってみませんか。

福田 貴一の
四つ葉café

中学受験をお考えの小学3・4年生のお子様をお持ちの保護者様のためのブログです。

早稲田アカデミー
教育事業第二本部
副本部長
福田 貴一

中学受験に関するブログを公開しています。このブログでは、学習計画の立て方、やる気の引き出し方、テストの成績の見方、学校情報など、中学入試に関するさまざまなことについて書いています。

詳細はWebをご確認ください。

早稲田アカデミー 検索

左の二次元コードを読み込んでご確認ください
スマートフォンのみ対応